

あいほら やすのぶ
相原 康伸

意義ある模索を続ける一年に

●連合・事務局長

「福」の広がる1年に

世界各地で、年々、影響が広域化、甚大化する気候変動問題。77億人余が暮らす「地球号」が持続可能性の危機に晒されています。「point of no return」。引き返し不可能な臨界点は、人類がいかなる行動を起こしてみせるのか強烈に問いかけています。そして、投げかけられた問いへの答えの一つは、自然災害が頻発するわが国こそが、世界の英知を集め、人類規模の課題に敢然と立ち向かうことではないでしょうか。同時に、これまでとは数段異なるレベルでの「防災」、「減災」意識、それに基づく確実な実践など、私たち一人ひとりが世界の模範となることです。

一方、年々細くなる地域のつながり、孤立する高齢者など、日本の地域社会の持続可能性にも強く警鐘が鳴らされる今、助け合い、支え合うことは、誰かに寄り掛かることなく、弱い立場、困難な状況にある人々に自然と手を差し伸べられる一つの社会のあり方です。

自助・共助・公助。身の回りを見渡せば、分かち合いの姿かたちは様々で、その出番も多様です。人々の日々の行動にせよ、広く国民をカバーする諸制度にせよ、ありたい社会の姿を共通の価値観として、小さくとも確かな支え合う行動が和となり積み上がる。そこに意義を見出す。そうした社会でありたいものです。「福」を広げる本年。その源泉は、意外と身近にあるような気がします。

グローバル化と民主主義

連合結成は、1989年11月。続く12月には、ブッシュ大統領とゴルバチョフ大統領によるマルタ会談。若者たちがベルリンの壁をよじ登り、つるはしを振り上げる印象的な映像が世界を駆け巡りました。東西冷戦の終焉が世界に告げられた瞬間です。その歴史的転換点と軌を一にして幕を開けた連合。世界が新たな国際秩序を模索した30年であり、平成時代と並走した30年と言えるでしょう。

一方、世界の労働市場へ次々に流れ込み低廉に扱われた労働力がもたらした変化は激烈でした。「race to the bottom」。グローバル競争の激化は、底辺に向けた競争を駆り立て、「労働」の社会的な位置づけを低下させた時代と言っても過言ではありません。

そして現代。グローバル化は、日本企業の世界展開を加速させ、進出先に多くの雇用機会を生み出しています。一方で、自国利益最優先の言動が世界を覆い、極端な主張に基づく政治勢力が台頭しています。それらの言動が幅を利かせる国際社会はなお一層不安定さを増しています。グローバリズムと民主主義が必ずしも同調しない深刻な事態と受止めざるを得ません。壁を壊し創造の時代を迎えたはずの国際社会が30年を経て再び、分断と不信の時代を迎えることを誰が想像したでしょう。この事態を私たちはどの様に受け止めるべきでしょうか。世界が新たなアプローチを模索する一年とする必要があります。



結び合う社会

日本の高度経済成長は、今につながる社会保障制度の基盤整備や社会資本の充実として実を結びました。多くの働く人の明日への希望とも重なり合う時代です。戦後、成長の階段を駆け上がる日本を支えたのは、若く、健康な、正社員の男子が、長時間働くというモデルでした。毎日の仕事は大変でも、やがては、自分の両親の生活レベルを超えていけそうだとおぼろげながらも人生の輪郭を見出した時代とも言えます。

一方で、大気汚染の深刻化など、新しい社会問題も惹起し、年30%にも及ぶ狂乱物価が、家計を直撃するなど、さながら「成長痛」のような事態が、日本を覆っていきました。

その中で、春季生活闘争は、その時代を代表するパターンセッターが相場を形成、リードし、横並びの解決が取り組みの前進につながりました。勿論、春季生活闘争は、賃金を中心とする経済闘争です。年々の経済的価値の獲得度合いは測定が可能です。一方、円や%の単位を用いての測定は相応しくありませんが、いわゆる「春闘」が、働く人の将来を照らす一つの指標として、社会を「統合」する力を発揮してきた点を私は強調したいと思います。「春闘」の社会的な意義と言っても良いでしょう。

一方、労働条件を決定するにあたり、当時の日本を支えた、いわゆる「サラリーマン」

の働き方や社会の構造そのものが「画一的」だったことも忘れてはなりません。40年前の専業主婦家庭は、1,200万世帯。現在はその数は半減し、共稼ぎ世帯が1,200万世帯を数えます。時代、時代の環境変化を踏まえつつ、付加価値の再分配機能として、今後とも最善のメカニズムを模索していく必要があります。

多様性を育む社会

令和時代も2年目を迎えました。社会の構成は多様性を増しています。ジェンダー、国籍、宗教、障がいの有無、雇用形態にかかわらず、一人ひとりの可能性を最大限に発揮し得る社会の実現が待たれます。一見、それぞれの個性が際立っても、しっかりとつながりあう社会。これからの時代、そこにこそ人々のエネルギーを宿らせたものです。異なるからこそ、真の連帯。違いを認め合うことから生まれる新たな発想。そこに新しい時代の労働組合の役割も集めていきたいと思えます。

2020春季生活闘争もいよいよ開始。働く人、経営者、大企業、中小企業、組合員、労働組合に組織されない皆さんなどなど、それぞれの持ち場、立場から見える景色は違っても、目指すは一つ。より良い職場、明るい社会の構築。みんなで考え、参加する「みんなの春闘」の姿を世の中に発信する時です。